

小石川植物園の貝塚

長田 敏行

「小石川植物園に貝塚がある」といっても、しばしば怪訝な顔をされるのは一寸見たとき、それらしく見える盛り上がった場所など見えないからでしょうか。しかしながら、その貝塚は、モース博士らが「大森貝塚」に次いで発掘した「由緒正しき」ものです。それを紹介しようというのが本稿の目的ですが、その前に、モース博士とはどんな人が簡単に触れます。

モース博士と小石川植物園の貝塚

モース (Edward Sylvester Morse) 博士は、東京大学理学部生物学科の初代動物学教授であり、大森貝塚の発見者であることはよく知られています。しかしながら、この二つの事実も実は、多分に偶然に導かれた結果であることは意外と知られていないので、そこから入ります。モースは、アメリカニューイングランド生まれで、独学で動物学を修め、ハーバード大学でアガシー (Louis Agassiz) の助手を務め、貝類の分類で業績をあげました。彼は、当時未だ危険視されていた向きもある進化論を積極的に受け入れていたので、それに対して反対であった師にして、スイス生まれのカルバン派であるアガシーからは離れました。そして、シャミセンガイ等の腕足類を研究するため 1877 年に日本を訪れました。東京大学創立の年です。日本到着の翌日、当時外国人には移動禁止区域があったので、そこでの調査の便宜を図ってもらうため、文部省顧問となっていた知人マレー (David Murray) 博士を文部省に訪問しました。そこで、文部省・大学関係者に大変な好印象を与えたようで、マレー博士も伴って日光へ調査旅行に行っている間に動物学教授への就任がトントン拍子に決まったのであり、彼は決して教授として招聘されて日本へ来たものではありません。しかも諸種の事情で破格の条件でした。また、横浜から新橋への移動の途次に乗った鉄道の窓外に小高く盛り上がった地形と白く見える貝殻をみて、直ちにアメリカ東海岸で調査した貝塚 (Shell mound)

を思いました。貝塚は先住民の遺跡であろうと発掘したのが大森貝塚です。当時助手であり、後に教授・植物園長となった松村任三と学生等が協力しました。その報告は、東京大学の最初の学術報告となり、その内容は Nature 誌にも投稿され、その概要は今日でも岩波文庫の「大森貝塚」として見ることができます。その評価は高く、日本考古学の重要な出発点であったが、その姿勢は必ずしも直ぐには継承されなかったという評がなされております¹。また、最近東京大学理学部ニュースにも紹介されたので目にされている方も多いと思います。

その彼が二番目に発掘したのが小石川植物園の貝塚です。更に、太政官命令も得て、関東一円の貝塚が調査され、それらの出土品は東京大学総合研究博物館に所蔵されています。このように小石川植物園の貝塚は由緒正しいものですが、この事実もそれ程人々には知られていないので、初めにも触れたように多くの方はその事実に一様に驚きを示すが、現在の海岸線が遠く離れているからでしょうか。なお、「大森貝塚」とその報告は、日本の考古学の出発点として今日でも尊重されているが、モースは東大での契約期間は二年間であり、後に何度か訪日はするものの、アメリカへ帰国したので小石川植物園の発掘報告は公式にはなされておられません。これらの事実を喚起することが第一の目的であるので、これだけ述べれば本稿の動機の何分の一かは果たされました。しかしながら、小石川植物園に貝塚があったことの意義とその意味することを理解するためには、その後の日本考古学の発展によりもたらされた蓄積と知見に頼らざるを得ません。

戦後の発掘²

小石川植物園の貝塚は、1950 年になって東洋大学の和島誠一教授らによって再度調査されました。それまでには、縄紋土器 (モースが Code marked pottery と呼んだ土器に縄紋という日本語を宛てたのは、後に農科大学教授となった白井光太郎であるので、ここでは命名者に敬意を表して縄文でなく、縄紋とします) の編年がなされてい

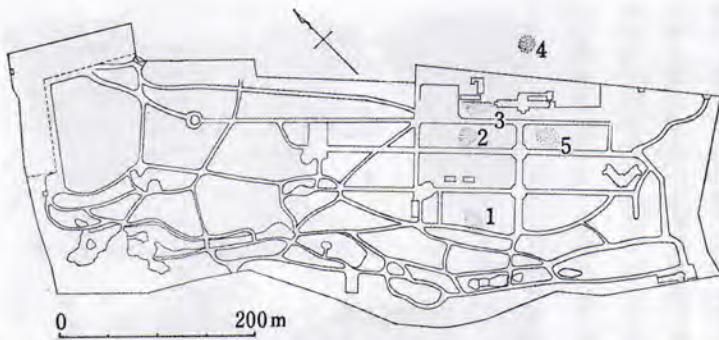


図1: 小石川植物園の貝塚(文京区史・巻一²、207ページの第21図を転載)。

たので、小石川の貝塚の年代推定が可能となりました。また、炭素同位体による年代測定も行われるようになったので、絶対的な時代の推定が可能になりました。

ここで、発掘者和島教授の概略を述べますが、和島氏は、東京大学人類学科選科の出身で、戦前より革新的考古学の旗手で、東洋大学の後には、1966年に岡山大学教授となり、岡山県津島遺跡他の発掘と保存で顕著な活動をし、日本学術会議会員としても積極的に遺跡の保存活動をしております。また、資源科学研究所に在籍していたことも触れる必要がありますが、資源科学研究所は、戦時中に国策にそって設立された文部省所管の研究所以、植物学教室の多くの方々も資源調査のために南方へ行っております。このため敗戦とともに、民間組織の財団法人となり、その所長であった柴田桂太先生は、大いに苦勞されたと同っており、そのため1949年に亡くなられました。このことを述べる理由は、小石川植物園のその折の発掘の出土品は資源科学研究所に保管され、資源科学研究所が国立科学博物館に吸収された関係で、国立科学博物館所蔵となっております。実をいうと、この経過の調査は未だ十分ではありません。

まず、和島教授らは電気探査で住居跡を探索し、縄紋中期の竪穴住居を二つ完掘し、多量の土器と石器を発掘しました。小貝塚は、5ヶ所あり、図1に示されるような分布ですが、温室付近を中心に分布しており、そのうちの一つは、園の外です。このことから貝塚の分布は、南東に向けて馬蹄状になっているのではと推定されています。また、ボーリング調査も行い、貝塚の厚さやその全体の様子も調査されています。馬蹄形貝塚という千



図2: 小石川植物園から出土した縄紋土器(文京区史・巻一²、209ページの写真を転載)。

葉市の加曾利貝塚が著名ですが、それ程巨大ではありません。

縄紋土器については、中期のものとして、勝坂式、加曾利E式土器が認められ、同位体炭素の年代測定から紀元前2563年±500年(およそ4600年前)とされています。また、後期から晩期にかけては堀之内式、加曾利B式、安行I式土器が出土しており、その時代はおよそ3300年前との推定です。更に、破片ながら晩期の遮光式土器も見られます。

興味があるのは、貝塚の貝の種類で、中期のものからハマグリ、サルボウ、シオフキ、オオガイ、マガキ、バイ、ツメタガイ、イボニシ、アカニシなど海産性のものが見られるのに対し、後期から晩期にかけては淡水性のシジミなどに変わっていることです。中期からは、シカ、イノシシの骨も見られます。

小石川の情景

ここから描ける小石川の情景を、関東平野の状況を加味して素描してみたいと思います。まず、1万年くらい前の最後の氷河期が終わって地球は温暖化に向かいますが、その頃のこの地域の人類の痕跡としては、横須賀の夏島で、出土する土器から紀元前7491±400(9500年前)とされ、縄紋の早期に当たります。また、この頃霞ヶ浦方面にも別な文化圏に属すると思われる住居跡が認め

小石川植物園のアザミ

門田 裕一

られます。そして、この時期東京湾はずっと内陸へ入り、いわゆる有楽海が形成され、最も広がった時点では栃木県藤岡市まで達していましたが、それは貝塚の分布でわかります。文京区付近での居住の痕跡は、それよりやや遅れ縄紋中期になって認められ、それは湯島付近です。より広く住み始めるのは縄紋中期で、遠浅の入江が形成され、貝類も豊富で、それを食料とする人々が住み、その一つが小石川植物園で、4500年前のことです。その他に、お茶の水、千駄木、駒込にも集落はあり、狩猟も行っていたことは、出土した骨から分かります。

それから、1000年以上下った縄紋後期とその後の晩期にかけて、地球は徐々に寒冷化し、それに伴い東京湾は退潮し、淡水化していきます。それが小石川植物園の貝塚から分かります。この間人々は住み続けていますが、土器の様式が何度も変わっているので、文化的背景は変わっているのかもしれない。もう一つの視点として、人が住むためには水場が必要ですが、それは今も台地の下にある湧水であったろうと思います。というわけで、小石川植物園の台地には何千年にわたって人々が住み続けたかなり珍しい場所ということがいえるでしょう。

これから先は以前書いたことがあるように³、稲作をする武蔵の国造系の人々がやってきて、その人々が祭ったのが簸川神社でしょう。というのは、簸川神社ももとは植物園内にあったが綱吉の小石川御殿を作るため移転したということです。このように小石川の場合からは4500年以來の関東平野が開かれていった様子が見えてまいりますので、一度その情景を思い浮かべてくださったらと思います。

[参考文献]

1. E.S. モース (1983) 大森貝塚、近藤義郎・佐原真訳 (岩波文庫)。2. 文京区役所編 (1967) 文京区史、巻一。3. 長田敏行 (2003) 小石川植物園後援会ニュースレター第25号。

(ながた としゆき・

法政大学教授、東京大学名誉教授)

私は日本産アザミ属 (キク科) の分類学的研究に取り組んでいて、アザミを求めて日本中の山野を駆け巡っているところです。本格的に始めてから既に20年以上が経過しましたが、未だに解決できない問題点も多数抱えています。しかしながら、一方では、120種以上もある日本のアザミの奥深い世界を楽しんでいるのもまた事実です。

2010年10月のある日、邑田園長からアザミの同定依頼がありました。そのアザミは当時小石川植物園の園内に開花していたもので、姿形は植物園ライフングリーン・プロジェクトのホームページ (HP) から見て欲しいとのことでした。また、このアザミは園内のあちこちで旺盛に繁殖しているそうです。早速、HPの画像を拝見しました (表紙写真)。それはとても良い写真で問題のアザミの姿形を良く表していました。

私は30年ほど前の大学院時代に、小石川植物園に2年間ほどお世話になったことがあるのですが、当時はアザミのことなど全く眼中になかったので、園内にどのようなアザミがあるのかよく知りません。関東平野の一部として、ノアザミ、トネアザミ、ノハラアザミなど園内には数種のアザミがあると思われますが、ここではこのアザミを「小石川植物園のアザミ」と呼ぶことにします。

画像を一見して分かるのは、頭花が直立することです。また、全体の形と雰囲気からこれは正しく日本産のアザミであることがわかりました。日本産のアザミで頭花が直立するものは多くはありません。このことと、茎の中部に大型の莖葉を付け、その葉身が中裂～深裂することで、このアザミはマツシマアザミ *Cirsium sendaicum* Nakai [= *C. matsushimense* Kitam.] であろうと見当をつけました。このアザミは岩手県中部以南から宮城県にかけての太平洋側沿海地に分布します。マツシマアザミは図鑑や地方植物誌にも出てこないのですが、まとまった形態と独自の分布域をもつ、実在する種とみなして良いと私は考えています。

マツシマアザミは関東地方には分布しません